

手記

登校拒否

今回から4回にわたり、中学校時代登校拒否をしていた子供の母親の手記を原文に近いまま掲載します。

今になってみると、なぜこの子が登校拒否をしていたのか疑問に思うくらいで、毎日希望に燃え高校に通っておりません。

同じような悩みをもつお母様方の参考になれば幸いです。

私の体験

C子の母
今高校生の母として、我が子が中学生時代登校拒否で悩

んだ時のことを書きます。同じようなことで悩んでおられる方があると聞き何かの参考になればと思いペンをとることにしました。

C子は小学校の時はとても良い子でした。勉強は先生方に言われなくてもし、親から言うのもおかしいですが手のかからない良い子だと思っていました。私がいろいろと世話をやいても気にしないで言うことをよくきいていました。当時はこの子が登校拒否をするというようなことは、考えてもみないことでした。そんな状況で中学校へ進んだのです。

中学校という新しい環境に入って部活もテニスに入りました。もともと運動はあまり

好きではなかったのですが部活にも精をだしがんばって通学しておりました。

中学総体の頃かと思えますがちよっとした行き違いからトラブルがあったのです。服装のことでC子だけ長袖のジャージを着て行き、まわりの人は半袖の体育着を着ていたのです。この事で先生より叱られたと聞いています。女の子ですから些細な事で心が傷ついたのか朝になると学校へ行くのを渋るようになりました。

二期期になって部活のテニス部をやめて家政部に入りたいたいいました。先生方はこの事を許してくれませんでした。子どもは神経を使い、いらいらしているようですがよくわかりました。そしてだんだんと学校へ行かなくなり、休んでは行き、行つては休むというようになりました。

私も学年の途中で部活の部を変えたいことは子どもの我がまままだ位に考えていました。それに先生方のおっしゃることもよく判りましたので登校を促していました。しかし子どもは次第に学校に行かなくなりました。(つづく)

子供会シリーズ

自然発生的集団

子どもは遊ぶことによって人格がつけられていきます。遊ぶことは子どもの人づきあいをよくし、集団になじみ自立します。

子どもは幼児のよちよち歩きから友だちを求め、小学校の六年生位になるまで、近隣に友だちをつくります。その数は七、八人から、十人以上に及べば望ましいのです。この集団を自然発生的集団とします。この集団は遊びを媒介としてちゃんとしたルールがあります。このルールを守ったり破ったりしながら、友だちとつき合っていきます。そうすることによって、人と人がつきあうという適応力をつくっていきます。

自然発生的集団は友だちとのつき合いをうまくしますが、時には悪いこともあります。戦後の子どもの集団はスイカ泥棒をしたり、柿泥棒をして大目玉をいただきました。こういう子どもの集団をそのままにしておいては困るといふ考えで子ども会をつくるようになりしました。自然発生的集団をそのままにしておかないで、

良い遊びをさせよう。これが初期の子ども会なのです。

自然発生的集団を軸にして、子ども会をつくる。これが望ましい子ども会ですが、現在は自然発生的集団がくずれているか又はなくなってしまうといつてよいでしょう。

子どもの数が少なく、子どもをとりまく社会が激しく変化して子どもの遊びをとり上げてしまったと言つてよいでしょう。たとえば、学校からの帰りは遅い、そして塾、おけいことなど子どもが遊ぶ時間がないのが実態ではないでしょうか。

自然発生的集団のないことは望ましいことではないが止むを得ないでしょう。そこから子ども会を作る時は、なるべく遊ぶことから始めることが大切です。道徳的な指導とかお説教はまず止めてみんなが遊ぶことは楽しいことだということを感じさせることです。少々ささいだり、言うことを聞かなくても叱らないで子どもだけで集団がつかれるようにしたいものです。

電話(43)1111
内線216教育相談室

